

# AO 入学者の視点

—入学後 AO 入学者全員面接調査から—

福島真司（鳥取大学）

一般的に AO 入学者は、志望学科への高い関心や学習への強い意欲、ユニークな活動歴等を評価されて、入学を果たしたと考えられる。また、大学入試センター試験受験後に、その得点率によって大学を選択した一般選抜受験者よりも、志望大学に関する大学研究を詳しく行っていると考えられる。それでは、AO 入学者たちは、入学後、実際にどのような活動を行い、また、彼らが入学した大学をどのように評価しているのであろうか。本稿は、これらの詳細を調査するによって、この入試制度の評価について、問題提起することを目的とする。

## はじめに

入試制度を評価する方法として、最も一般的に用いられるのは、大学入学後の学業成績を基準として用いる評価方法である。これは例えば、AO 入試、推薦入試、一般入試等それぞれの入試制度で入学した学生が、入学後どのような学業成績であるのかを調査することにより、どの入試制度が質の高い学生を獲得するために効果的であったかを評価するものである。学業成績がよければ評価が高く、悪ければ評価が低い。これらの調査報告は枚挙に暇がないが、当然ながら学業成績のみが、学生の質を表すわけではない。特に、学習への意欲・関心、リーダーシップ、ユニークな活動歴等を多面的に評価して選抜する AO 入試を、入学後の学業成績のみで評価することについては、問題も多い。彼らが、大学入学後に発揮するリーダーシップやユニークな活動等について評価することも重要だと考えられるからである。しかしながら、ある学生が入学後どのような活動歴を持つかという調査データを蓄積し、その分析をもとに、入試制度を評価するという方法を筆者は寡聞にして知らない。学生一人一人の活動歴を子細に調査しようとするれば、学生一人一人と面接し、

丹念に聞き取ることが必要であるが、これには大変な時間的コスト等が発生するため、当然と言えば当然であろう。しかしながら、AO 入試を精確に評価しようとするれば、この調査は極めて重要ではないかと筆者は考える。

また、大学側は入学した学生を評価することには熱心であるが、一方で、高い意欲を持って入学した AO 入学者の大学への評価について調査することには、あまり熱心でないように思える。AO 入学者は、当然ながら大学へ大きな期待を抱いて入学を果たしたと予測されるが、入学後、彼らはどのような視点で大学を見ているのであろうか。仮に、AO 入学者が、学習への意欲・関心を減退させ、学業成績が低迷している場合、その原因は、AO 入試という制度自体の問題であるということに収斂されてよいのであろうか。

本稿は、T 大学における AO 入学者について、2006 年 2 月～3 月に実施した全員面接調査の結果をもとに、彼らの視点での大学への評価や、彼らの大学での活動歴を分析し、AO 入試をはじめ入試評価に関する一提言を述べることを目的とする。

## 1 調査概要

調査は、以下の要領で実施した。

### 1.1 調査期間

調査は、2006年2月T大学後期試験終了時～2006年3月にかけて実施した。海外渡航中だった者等一部の者については、2006年4月第1週に実施した。

### 1.2 調査対象者

調査は、T大学の1学科を除く全てのAO入学者を対象として実施した<sup>1)</sup>。T大学は、平成16年度(2004年度)入試より、3学部においてAO入試を実施しており、本調査実施段階では、1年生、2年生の、2学年のみが在学している。調査対象者の概要は、表1の通りである。

表1 調査対象者の概要

				(人)
	A学部	B学部	C学部	合計
2004年度入学者	16	19	5	40
2005年度入学者	16	23	8	47
	32	42	13	87

合計87人を対象として、調査を実施した。ちなみに、T大学の一学年に占めるAO入学者の割合は、約4%である。

### 1.3 調査方法

調査は全て面接で実施した。あらかじめ調査票を用意して調査を行ったが、選択式ではなく自由回答を求める質問形式が多かったため、調査時間については、最短で一人約25分間、最長で一人約90分間を要した。

## 2 調査結果とその考察

本稿では、調査結果の中で、次の質問項目について報告する。「大学満足度(T大学の総合満足度、T大学の授業の満足度、T大学の課外活動における満足度、大学外の活動の満足度)」「T大学教員との交流」「T大学入学後の活動歴」「T大学入学前後のギャップ」「T大学への不満(主に教育活動に関して)」につ

いてである。

また、AO入学者の大学入学後の活動歴を紹介し、その特性を見る。最後に、自由回答を求める質問項目である「入学後に感じた、入学前のイメージとのギャップ」「大学に改善を期待したい点」に表れた回答を分類し、その結果についても報告する。

### 2.1 大学満足度

#### 2.1.1 2004年度入学者の2年間の推移

2004年度入学者について、1年生(2004年度)終了時点と、2年生(2005年度)終了時点での比較を行う。次頁の図1は、大学の「総合満足度」についてである。10点を満点として、それぞれの調査対象者に、1年終了時と、2年終了時のT大学の総合的な満足度を聞いた。その総和を、人数で割ることにより各学部の平均満足度を算出した。以下、満足度については学部ごとの平均満足度を表している。3学部の間では、1年終了時、2年終了時共にC学部の満足度が最も高いが、2年終了時にはC学部は満足度0.60ポイントを下げている。下げ幅は3学部中最も大きい。他の2学部についても、C学部ほどではないが、A学部0.04ポイント、B学部0.30ポイントとそれぞれ満足度を下げている。

図2は、「授業の満足度」の調査結果を表している。10点を満点として何点であるかを聞いているが、その際に、自分自身の成績や出席態度等の満足度はこれに含めず、学生側からの一方的な授業の満足度を聞いた<sup>2)</sup>。この結果からも、C学部の満足度が他の2学部に比して大きいことが看取される。1年終了時から2年終了時に移行するに従って、C学部はさらに満足度を0.8ポイント上げている。他の2学部については、1年終了時はほぼ変わらない満足度であるが、2年終了時にはA学部は、ほぼ横ばいであることに対して、B学部は0.84ポイント満足度を下げている。

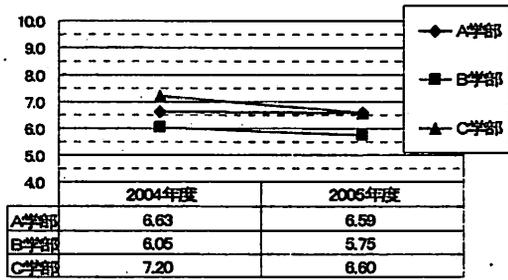


図1 大学総合満足度

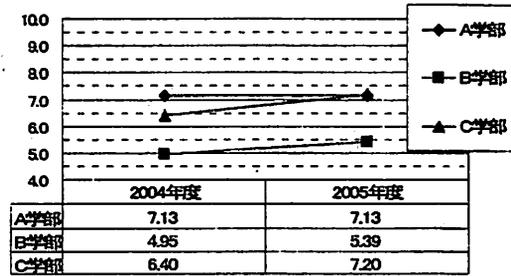


図3 課外活動の満足度(全体)

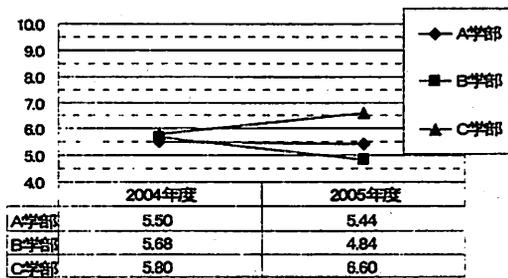


図2 授業の満足度

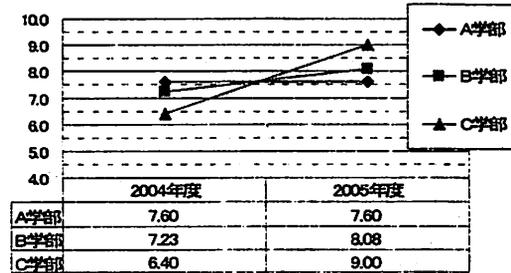


図4 課外活動の満足度(参加者)

サークル等課外活動への参加率について表したものが、表2である。課外活動には、サークル以外に、大学祭実行委員や学科等の雄志で作った研究会活動等、大学内において授業以外で実施される諸活動を含めた。課外活動の参加率については、1年生から2年生にかけて、全体に減少している。A学部については全く変化がないが、他の2学部については、参加率が下がっている。B学部は3学部中最も課外活動の参加率が低い。

表2 2004年度年入学者の課外活動参加率

	A学部	B学部	C学部	合計
2004年度	93.8	68.4	100.0	82.5
2005年度	93.8	63.2	80.0	77.5

図3、図4は、課外活動に関する満足度を表したものである。

図3は、課外活動を全くしていない学生については満足度を0として、各学部の満足度のスコアの平均を算出したものである。一方、図4は、課外活動に参加している者だけを抽出して、その満足度を聞いた結果である。図3を見ると、課外活動の満足度について、参加率が高かったA学部、C学部の満足度が高い。一方で図4を見ると、課外活動に参加しているものは、一様に満足度が高く、1年次から2年次に移行するに従って、さらに満足度が大きくなっていることがわかる。

図5は、授業や大学での課外活動を除いた、大学外の活動に関する満足度を表している。これには、大学外でのボランティア活動、交友関係、アルバイト、趣味等を含めている。

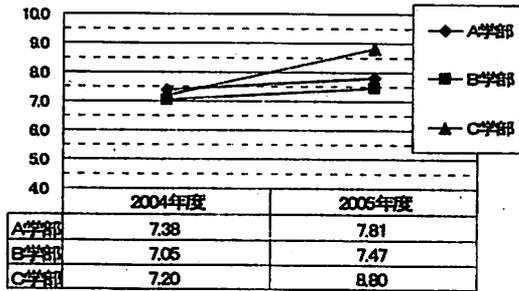


図5 授業サークル等以外の満足度

すべての学部において、満足度は7.0を越えており、他の満足度に比較して、大きいことがわかる。また、1年次から2年次に移行するに従って、満足度は上昇する傾向にあり、特にC学部においては、1.60ポイントも上昇し、かなり高い満足度を示していることがわかる。

2.1.2 2004年度入学生と2005年度入学生の比較

次に、2004年度入学生と2005年度入学生の、1年終了時における大学満足度についての比較を行う。満足度を比較した結果を一覧表にしたものが、表3である。

表3を見ると、学部によってばらつきはあるが、1年終了時での「全体」の総合満足度には、ほとんど差異がない。授業満足度については、2004年度入学生の方が高い。課外活動について、参加率は2004年度入学生の方が高いが、参加者の満足度は2005年度入学生の

方が高いことがわかる。大学外の活動については、2005年度入学生の方が、満足度が高い。2005年度入学生については、これが今後どのように変化するかが、注目される。

B学部については、他の2学部と比較して、授業の満足度、課外活動の参加率が低い一方で、大学外の活動についての満足度が高い。C学部は、どの項目についても、他の2学部より満足度が高いことがわかる。

2.2 教員との交流

2.2.1 2004年度入学生の2年間の推移

本面接調査では、学生の交友関係についてもいくつか質問している。ここでは、その中でも、「教員との交流」についての調査結果を報告する。質問内容は、「研究室を気軽に訪ねたり、親しく話せる教員が1人以上いるか」である。

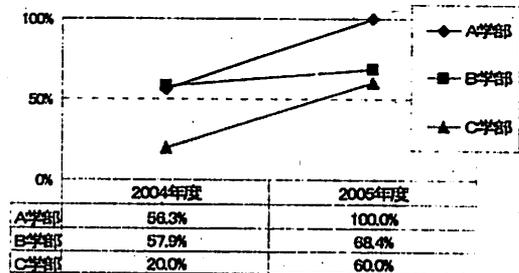


図6 親しい教員がいる

図6は、学部ごとに、親しい教員がいると回答した比率を表している。1年終了時(2004

表3 2004年度入学生と2005年度入学生の満足度比較

入学年度	総合満足度		授業満足度		課外(参加率)%		課外(全体)		課外(参加者)		大学外満足度	
	2004	2005	2004	2005	2004	2005	2004	2005	2004	2005	2004	2005
A学部	6.63	6.31	5.50	5.19	93.8	75.0	7.13	5.13	7.60	6.83	7.38	7.19
B学部	6.05	6.70	5.68	4.65	68.4	56.5	4.95	4.52	7.23	8.00	7.05	7.43
C学部	7.20	6.13	5.80	6.00	100.0	100.0	6.40	7.06	6.40	7.06	7.20	7.38
全体	6.43	6.47	5.63	5.06	82.5	70.2	6.00	5.16	7.27	7.35	7.20	7.34

※ それぞれの項目で、2004年度と2005年度を比較して、ポイントの高い方に下線を付した。

年度)では、学部によって差異が大きいですが、2年終了時(2005年度)にはどの学部も「親しい教員がいる」と回答する比率が増加していることが看取される。ただし、B学部の増加幅は、他の2学部に比して小さい。

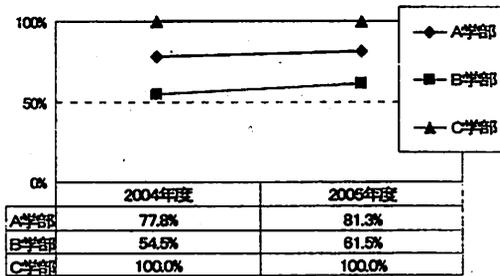


図7 親しい教員が学科の教員である

図7は、「親しい教員がいる」と回答した学生に対して、その教員が、所属している学科の教員であるかどうかを質問し、その回答結果を表したものである。親しい教員については、どの学部も所属学科の教員である場合が50%以上と多いが、B学部については、1年終了時54.5%、2年終了時61.5%と最も低い比率であった。

### 2.2.2 2004年度入学生と2005年度入学生の比較

図8は、2004年度入学生と2005年度入学生の、1年終了時における「親しい教員がいる」と回答した比率を比較したものである。C学部以外は、2004年度入学生の方が、比率が高いという結果であった。図9は、2004年度入学生と2005年度入学生の、1年終了時における「親しい教員がいる」と回答した者の中で、「その教員は学科の教員である」と回答した比率を比較したものである。C学部以外は、2005年度入学生の方が、比率が高いという結果であった<sup>3)</sup>。

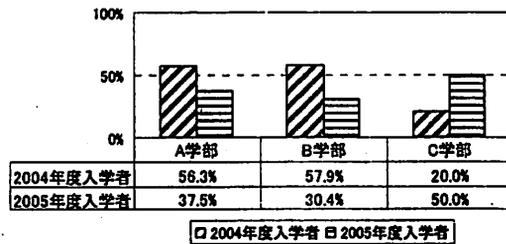


図8 親しい教員がいる

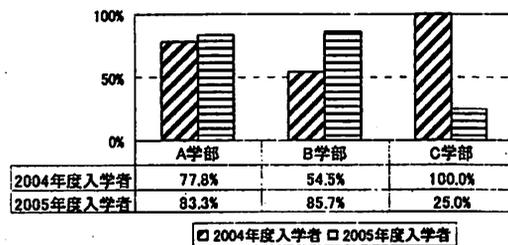


図9 親しい教員が学科の教員である

### 2.3 AO入学者の大学入学後の活動歴

AO入学者の大学入学後の活動歴については、本稿末に別表1、別表2として、まとめている。別表1は、2004年度入学生の活動歴である。表彰については、あまり多くはないが、学科でトップの成績を収め表彰された者もいる。体育会系サークル、文化系サークルで活躍を納めた者もいる。特筆すべきは、課外活動において、そのサークルでの「長」のような役職に就いている者の多さである。A学部では16人中9人、B学部では19人中7人、C学部では5人中3人が、それぞれの団体で役職者となっている<sup>4)</sup>。また、学外での活動についても、特記すべきものがある。A学部においては、福祉施設でのボランティアや地元伝統芸能の伝承、C学部においては自らがインターネット等で探した海外インターン(1ヶ月間)等、学部の特性に合った体験を自らが実施している例がいくつも見られる。

2005年度入学生については(別表2)、まだ1年が終了した時点であるため役職者は少ないが、A学部では16人中5人が、C学部では

3人が既に役職に就いているか、2年生になる4月から役職に就くことが決まっている。また、2005年度入学生についても、学外での活動に特記すべきものが多い。2004年度入学生と同様に、A学部においては、不登校支援のNPOで活躍する者、身よりのない子供のための施設で学習支援を継続して行っている者、地域活性化活動に積極的に参加している者等があり、C学部においては、地域の農山村ボランティアに複数の者が参加する等、学部特性に応じた自主的活動を積極的に行っている。なお、これらの活動について、「学科教員は知っているか」との質問には、多くの者が「恐らく知らない」と回答している。高学年になり、卒業研究のためのゼミに入った後であれば、卒業研究担当教員が把握するといったケースもあるであろうが、結局のところ卒業研究と関係のない活動については、教員の理解を得られないケースも多く、話さない(話せない)可能性もあり、卒業まで認知されないことも予想される。

T大学AO入試では、リーダーシップや自主性を持つ者を選抜したいと考えており、入試広報上それを積極的にプロモーションしている。本調査結果からは、学部によって偏りはあるが、この目的に適った人材の選抜が一定程度実現されていると言えるが、本調査を実施しない限り、学科教員であってもこの結果を知ることはない。

#### 2.4 大学に対する要望事項等

本調査では、「入学後に感じた、入学前のイメージとのギャップ」「大学へ改善を期待したい点」を自由回答方式にて質問している。その回答をいくつかのカテゴリーに分類し、特に教育に関するものを抽出して、上位6位までを表したものが、表4、表5である。

2004年度入学生(表4)、2005年度入学生(表5)共に、「教授方法・教員に対する不満」が最も大きい。「教員のやる気にばらつきがある」「学生のレベルを無視した独りよがりの授業が多い」「高校の先生より教え方が下手」「一方的な授業が多く、双方向の議論ができない」等に代表される意見が多く見られた。また、カリキュラム構成上、全学共通教育科目が多いため、「授業の目的が不明・何のためにこの授業が設定されているのか説明不足」や「専門科目が少ない」との不満もあった。専門への意欲を評価されて選抜され、入学前教育で学習への動機付けがなされながら、いざ大学に入学すると一見して専門と無関係な授業科目が並ぶことに不満を抱えている状況が理解される。加えて、さまざまな活動を行おうとする際に「大学が学生の活動に非協力的」や「周囲の学生にやる気が感じられない」と不満を感じるのは、AO入学者の学習意欲の高さの裏返しとも考えられる。学力への不安については、「授業が難しい・ついていけない」に代表される回答をしたものは、特にB学部が多い。A学部、C学部については、あまり多くは見られないという結果であった。

表4 大学に対する不満等 (2004年度入学者)

	全体(40人)	A学部(16人)	B学部(19人)	C学部(5人)
教授方法・教員に関する不満	25	8	13	4
専門科目が少ない	14	5	6	3
必修科目が多く選択肢少ない	10	4	5	1
大学が学生の活動に非協力的	8	4	2	2
授業が難しい・ついていけない	8	0	6	2
授業の目的が不明・説明不足	5	0	5	0

表5 大学に対する不満等 (2005年度入学生)

	全体(47人)	A学部(16人)	B学部(23人)	C学部(8人)
教授方法・教員に関する不満	24	6	16	2
授業が難しい・ついていけない	17	0	17	0
授業の目的が不明・説明不足	10	4	3	3
専門科目が少ない	9	3	4	2
大学が学生の活動に非協力的	7	5	1	1
周囲の学生にやる気が感じられない	6	5	0	1

## おわりに

以上、T大学AO入学者の全員面接調査をもとにした調査結果及び若干の考察を述べた。先述したが、T大学においては、本調査の段階ではまだ2学年しかおらず、この2学年のみを対象とした調査であると言う点で不完全な報告である。今後このデータがどのような変化を見せるのか、継続して調査することが当然ながら必要である。2004年度入学生の大学の総合満足度及び授業満足度は、学年が上がるごとに低下しているが、大学教育の醍醐味が卒業研究にあるとすれば、ゼミに所属して、充実した卒業研究活動が始まれば、上昇に転じるかも知れない。また、授業以外の活動の満足度は、学年が上がるにつれて上昇しているため、2004年度入学生が4年生になる頃には、さらに総合満足度が上昇するという期待もある。ただし、現段階では、大きな期待を抱きながら大学に入学したが、その期待との間にギャップを感じている現状があることも看取された。しかしながら、その一方で、学部の特性に応じたさまざまな自主的活動を行ったり、学生団体でリーダーシップを発揮している状況も把握され、この面ではT大学AO入試の選抜方法に一定の妥当性が認められた。

しばしばAO入試を批判的に捉える方々の発言として、「AO入試の面接等でみせる受験生の学習への意欲・関心は受験のために作られたものであり、それは入学後の彼らの意欲

のなさ、学業成績上の困難が証明している」というものがある。しかしながら、GPA等に現れるスコアのみで、それは判断され得るものであろうか。リーダーシップや大学外でのユニークな活動は、当然ながらGPAには反映されない。また、本調査の結果にも現れたように、教員側の授業方法等に不満を抱え、それを言い出せないまま、あるいは直接議論をしても冷たくあしらわれた結果、学習への意欲を減退させ、GPAの低下を引き起こした例もある。GPAは、平均よりかなり高くても、AO入試で入学しながら友人が大学内におらず、ひたすら勉強のみをしているという例もあった。学業、諸活動、両方に力を発揮する例もあるが、どちらかといえば、学業以外の活動でリーダーシップを発揮したり、充実感を得ている者が多いという結果であった。このような学生の現状をどれだけの教職員が把握しているのだろうか。

高等学校までの教育現場では、担任教諭等が一人一人の生徒のさまざまな活動を包括的に把握しており、その中で生徒を伸ばす工夫もされている。大学ユニバーサル化を迎えた環境下で、大学のみがGPAのみに頼る学生評価、入試制度評価を堅持し続けるようであれば、ある学生の大学内での評価と、社会に出た後の社会からの評価には、研究職に就かない限りほとんど相関がないと揶揄される状況は続くかも知れない。社会からの期待に応えるだけの教育力が大学には存在しないと言われているに等しいこの状況は、筆者には決して

て健全とは思えない。

また、AO 入学者が大学に対する期待は、当然ながら大きい。AO 入試を志願する者は、大学案内を熟読し、大学のオフィシャルサイトで研究内容や学びの仕組みを研究し、多くの場合オープンキャンパスに参加し、その後に出願書類を作成し、入試において一定レベル以上のパフォーマンスを発揮し、入学を果たす。大学入試センター試験の結果に依存して志望校を決定する一般選抜受験者よりも、AO 入学者は、入学時点で大学について情報をより多く持っている。そうであれば、その彼らが入学後に感じるギャップ、不満は、その大学の改善にとって極めて有用な情報ではないであろうか。AO 入学者を丁寧にヒアリングし、AO 入学者の視点に立った教育等の改善を進めることが、その大学にとって、身の丈にあった大学改革を実現する方法ではないかと筆者は考えるのである。そこにおいて彼らのリーダーシップが発揮されるようであれば、この入試制度は大学経営にとって、極めて重要な意義を持つと評価できるのではないか。多くの方のご高見を賜りたい。

#### 注

- 1) T 大学 C 学部の 1 学科においては、本調査の対象外とした。他の全ての学科が、高校生、過年度卒業生を対象とした AO 入試であることに對して、この学科は大学既卒者（含大学卒業見込み者）のみを対象とした AO 入試であり、データの質が異なると予測されるためである。
- 2) これは、授業の満足度に自分自身への評価が混在することを避けるためである。授業内容自体にどうしても興味が持てずモチベーションを下げ成績が低かったケースや、授業内容に満足し出席状況がよくても高い成績を上げられなかったケース等さまざまケースが予想され、それが授業の満足度に反映されることを防ぐ目的でもあり、このような問い方をした。また、調査時に、「授業によって差異があるため、回答が困難である」との声も

聞かれた。しかしながらここでは、それぞれの授業の満足度の差異は捨象し、1 年間で経験した全ての授業の総合評価という形で聞いた。授業ごとの満足度や授業を分類した上での満足度についても、今後精査が必要である。

- 3) A 学部、B 学部は、2004 年度入学生、2005 年度入学生共に、人数が 15 人を超えているが、C 学部については、2004 年度入学生 5 人、2005 年度入学生 8 人と、少ない。そのため、特に図 9 において、一人の回答が全体の比率を大きく変えることにつながっている。C 学部のデータについては、その読み方に注意が必要であると考えられる。
- 4) 役職はさまざまであるが、「長」以外の役職者は、規模の大きな団体での役職のみを記載している。学年が上がれば全員が役職者になるという団体での役職は、表中に記載していない。

#### 参考文献等

- 福島真司、2006、「AO 入試の評価について- 鳥取大学 AO 入試に関する諸調査結果から -」、『大学入試ジャーナル』16, 89-97
- 中村肖三・福島真司、2006、「進化する AO 入試 - “背い鳥” を求めて -」、『大学入試ジャーナル』16, 83-88
- 渡辺哲司、2005、「AO 入試と大学における学習」、『大学教育学会誌』27(1), 146-151
- 渡辺哲司・島田康行・白川友紀・武谷峻一、2006、「指導教員による 4 年次学生の評価と入学者選抜方法」、『第 1 回全国大学入学者選抜研究連絡協議会研究予稿集』, 119-124

別表1 2004年度入学生の活動記録(2006年調査時点)

	サークル		役職者		具体名	表彰	学外での特記すべき自主的活動
	体育会	その他	体育会	その他			
A学部 合計 16人中	3	8	1	8	体育会ハンドボール主将 合唱団フィルコールパートリーダー 合唱団フィルコール正指揮者 学寮ブロック長 生協学生委員会委員長 平和学実行委員フェアトレード長 大学祭中央実行委員公開授業長 演劇部副部長 ギターアンサンブル指揮者	全国合唱コンクール銅賞(2名) ハンドボール日本海リーグ優秀選手賞	子ども読み聞かせボランティア 福祉施設ボランティア 朗読会開催(戦死者の手紙・マスコミ取材あり) 地元神楽伝承 地元地域活性化調査 短期留学(カナダ)
B学部 合計 19人中	6	4	2	5	大学祭中央実行委員外務局長 MIC(出版等)サークル代表(創設) 学寮イベント実行委員長 コミックイラスト同好会部長 合唱団フィルコールサブマネージャー 体育会テニス部外務 体育会テニス部内務	サッカー鳥取市長杯優勝 野田賞(学科トップの成績)受賞	養護学校学園祭スタッフ・ボランティア 子ども冒険基地ボランティア
C学部 合計 5人中	0	5	0	3	ESS部長 フォークソング部広報 大学祭中央実行委員企画局長		農業土木インターン(ミャンマー) 環境保護NGO参加(オーストラリア) 阪神大震災募金ボランティア 農山村ボランティア

別表2 2005年度入学生の活動記録(2006年調査時点)

	サークル		役職者		具体名	表彰	学外での特記すべき自主的活動
	体育会	その他	体育会	その他			
A学部 合計 16人中	2	7	0	2	Roots(政策勉強会)代表(創設) 大学祭中央実行委員企画局長 体育会硬式野球部副キャプテン 写真部部長 写真部副部長		短期留学(中国) 書籍出版 鳥取キタロウズ入団(地元野球クラブチーム) 高齢者ボランティア NPO不登校支援ボランティア 子ども施設学習支援ボランティア 地域活性化活動
B学部 合計 23人中	4	8	0	0			福祉講演会スタッフ 高齢者福祉施設慰問
C学部 合計 8人中	5	3	1	2	ゴルフサークル代表 コミックイラスト同好会同人誌編集長 平和学実行委員会代表		農山村ボランティア(4名) 海外バックパッカー(中国1ヶ月) 留学生支援活動(2名) 鳥取一東京一盛岡徒歩旅行